

# ウィニコット研究

Journal of Japanese Winnicott Association

vol.2 2024

巻頭言.....	1
シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2022 「環境」について考える.....	2
治療構造論と環境（中村 留貴子）.....	2
破壊性に向けての試論（増尾 徳行）.....	9
投稿規定.....	16
理事.....	18

Japanese Winnicott  
Association

## 巻頭言

ウニコット・フォーラム 2022 大会長 増尾 徳行

2022 年のウニコット・フォーラムは、ハイブリッド方式で開催した。2019 年に、私たちは協会発足の記念も兼ねた年次大会を催した。しかしその後、Covid-19 の感染が世界規模で拡大した。2020 年・2021 年の年次大会、そしてウニコット没後 50 年記念講演会は、オンラインで開催するほかなかった。本大会の準備・開催は、規制がやや緩んだ時期に進められた。対面をやってみよう、というのは会長の提案だった。

とはいえ 1 週ごとの感染者数によって、自治体ごとに規制の範囲が変更されていた。だいいち登壇者が直前に感染してしまったら、元も子もない。それに会場で感染者を出したとなれば、主催者の道義的責任まで問えてしまう風潮すら当時があった。けっこう、神経をすり減らす状況にあったのである。

にもかかわらず、会場に用意した席数はだいたい埋まったし、オンライン経由の方と合わせて、例年と変わらない参加があった。会場に足を運んでくださった方、オンラインで参加してくださった方、なにより困難な状況下で準備・運営を粛々と進めてくださった大会スタッフの皆さんには、感謝するばかりである。

十分とは言えないまでも、久しぶりに対面によるセクションがある大会だったので、大会デザインはウニコット・フォーラムの伝統に従った。つまりシンポジウム、講演、そしてパネリストを助言者に迎えての事例検討である。環境を再考する大会テーマしか思いつけなかったのは、今振り返っても、自然のことだったように思う。新しいウィルスが世界にひとつ現れただけで、これほどに右往左往したのだから。

シンポジウムでは、自我心理学、対象関係論、ラカン派の感性を持つ人たちが、この問題にどのようにアプローチするかを見てみたかった。講演を会長にお願いしたのは、個人—環境と二項対立的に捉えがちなこの問題について、システム論の持つ重層的な視点を得たかったからである。久しぶりに行なう事例検討には、臨床経験の豊かな先生に提示をお願いした。

対面ですることによる独特のライブ感を 3 年ぶりに味わうことができたし、各プログラムでの討論も、それを反映した熱気あるものになったと思う。何より、プログラム中にするひそひそ話や幕間でする小さな議論や与太話が、楽しかった。3 年前まで当然にあったそんなささいなものに、私たちが飢えていたと気づくことになった。

あれから 1 年以上が経った。対面で会合をすることに、うしろめたさを感じることはほとんどなくなった。モノや人の動きも、ずいぶん戻った。私たちは、あの閉塞感を、忘れつつある。けれどもウィルスが消えたわけではない。紛争はあれから増え、停戦のきざしすら見えない。そのうえ正月に起きた自然災害は、私たちに混乱をもたらしている。

それでも私たちは、忘れるだろう。Covid-19 も、数ある紛争も、自然災害も。私たちにそれらは、なくせない。ただ Freud の慧眼は、人間が困難を“克服”するプロセスを示した。すなわちなじんだもの heimlich を、忘れる。しかし抑圧を含意する接頭辞 un-を冠したそれは、私たちにとって不気味なもの unheimlich となるのである。

## シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2022 「環境」について考える

## 治療構造論と環境

千駄ヶ谷心理センター 中村 留貴子

キーワード:治療構造、治療構造論、転移、抱えること

## 1. はじめに

治療構造論は、病態水準や年代などにかかわらず、あらゆる精神分析的心理療法に適用される基本的な観点の一つになっている。

周知のように、小此木による治療構造論は、そもそもは背面寝椅子横臥の設定での自由連想法による精神分析療法に特有の治療構造のあり様と、そこでの治療技法をめぐる研究から始まった。治療構造という概念は、エクスタインが「心理療法の構造的観点 (Structural Aspect of Psychotherapy)」の中で、「構造的な関係の中で観察されたクライアントの精神活動の現れは、構造に対してすべて同じものではない。むしろ、構造は新しい観察をもたらし、新しい技法を示唆し、新しい理論を生む。そして、この新しい理論と技法は、構造の一部となって、再び新しい発見を生み、古い構造をより一層有用な道具にする」と論じたことに基づいている。一定の構造が設定されることによって、その個別性が際立ち、未知への道が開かれ、そこでの発見がさらなる再構造化が促されることになる。このような思考に導かれて、小此木は、精神分析的心理療法における治療構造の諸要素とその機能についての研究を行うようになっていった。

やがて小此木は、このような主として対一の精神分析療法における認識の方法論を発展させて、力動精神医学の実践や、入院治療における治療環境とその構造化についての認識、家族療法における理解の準拠枠などにも広げていくようになった。

したがって、治療構造論は非常に多岐にわたり、多面的で多義的な要素を含むものだが、ここでは、精神分析的心理療法における転移の理解と、それにまつわる現実的側面としての治療構造の意味、その観察に基づいた治療構造論的認識を理解するために、まずは治療構造論の概容を振り返ることから始め、併せて「心理療法を取り巻く環境」という視点から治療構造論について改めて考えてみたいと思う。

## 2. 治療構造と治療構造論

精神分析的心理療法は、原則として一定の治療構造の下に行われるが、物理的空間的なものにせよ心理的なものにせよ、いろいろな形で心理療法の過程や治療関係に影響を与えることになる。ここで言う治療構造とは、心理療法の基本的要素や条件が構造化されたものを指し、一定の規則性と恒常性を持って存在し、容易には変更されない構造を指す。そして、二人の関係はやがて習慣化されていくことになるが、その中には、セラピストが意図的に設定する治療的枠組みもあれば、受身的に引き受けざるを得ないもの、自然発生的に生まれてくる相互関係性なども含まれる。そして、そのような構造化された治療構造は、秩序を重んじる父性的機能と、その恒常性一貫性のゆえに、安全で安定した構造の中で受容するという母性的機能を同時に提供することに繋がっていく。そして、治療構造の各要素は、治療関係・転移関係を育む媒体として立ち上がり、内的現実と外的現実が

出会うことのできる場としての機能を担うことになるが、なんらかの理由で大なり小なり治療構造が変化または破綻しかける時、治療構造の在りようはさらなる媒体として機能し始めることになる。

治療構造それ自体は、たとえそれがどのような理論や方法論を背景とするものであれ、あらゆる心理療法関係において、クライアントとセラピストを取り巻く現実的状况や環境として存在している。治療構造論的認識においては、そのような現実としての治療構造について、クライアントが、そしてセラピストが、その内的な世界でどのように感じ、体験し、影響を受け、空想を投影しているのかについて観察し、それによってそこに漂う無意識的な世界と意味について理解しようと試みる。治療構造の在りようと治療関係はどのように相互に影響を与え合っているのかを観察することで、無意識的な世界や対象関係の在りようについて理解を試みる視点が、治療構造論的認識と言える。

### 3. 治療構造の各側面について

このような治療構造にはいろいろな側面があるが、主には、意図的に設定される治療構造、非意図的に存在する治療構造、自然発生的に生じる治療構造が挙げられるので、まずはそれを整理してみることから始めたいと思う。

#### ①意図的に設定される治療構造

心理療法の開始に際し、セラピストは、面接を継続するための一定の治療的枠組みを意図的に設定し、提供する。通常は、まずは心理アセスメント（主としてアセスメント面接と心理検査による）を行い、その結果に基づいて心理療法の目的と方針を立て、面接技法を選択し、これからの共同作業が少しでもスムーズに展開することを念頭に置きながら、面接の構造化を行い、契約を取り交わす。セラピストは、面接の構造化を行うとともに、作業同盟の形成に向けて、望ましい構造、可能な構造、できれば避けたい事態とその対応、などに

ついて模索することになる。これらの観点については狩野らが詳しく論じているが、構造化をする際には、面接室の設定や治療的環境などの物的・空間的構造や時間や、頻度などの時間的構造も関係する。禁欲規則や行動化の制限など、治療関係の継続にかかわるような種々の取り決めやルールも含まれる。例えば、思春期のクライアントのような場合などにおいては、家族とはどのようにかかわるのかという課題もあるだろう。そのように、これから面接を始めるに当たっての方針をたて、クライアントの同意を得た上で、継続的な面接に入っていく。したがって、初期の治療構造の設定は、セラピストがそのアセスメントに基づいて主体的能動的に提供することになる。

#### ②非意図的に存在する治療構造

治療構造の中には、セラピストが必ずしも意図的に設定したわけではない諸条件が生まれてくることもある。たとえば、本来なら入院治療が望ましいと判断したとしても、諸般の事情から外来通院で対応せざるを得ない場合もあるだろうし、個人心理療法と並行して家族への治療的援助が望ましいと思われたとしても、人的資源の不足などから、結局はセラピストが一人で引き受けなければならない事態も生じ得る。あるいは、チーム治療の導入が適切であると判断されたとしても、そうできないことも臨床の実際では少なくない。チームといっても、主治医との意見の食い違い、治療方針のズレなどで苦戦している心理療法家は少なくないように思われる。そもそもクライアントとセラピストがどのような治療的条件の下で会うことになったのかということ自体が、既にセラピストの意図を超えたところで受身的に与えられた治療構造を構成しているということもできる。

このような非意図的受身的に出来上がってしまった治療構造においては、その現実的側面からの制約や難しさを多少なりとも引き受けることになり、場合によっては現実状況への順応に四苦八苦

しながら心理療法が進められることにもなりかねない。したがって、現実的状况とそれに伴う制約について、まずはありのままに認識し、その事実がクライアントとセラピストの双方にとってどのような心理的意味を持つのか、または影響を及ぼしているのかについて理解するとともに、必要に応じて話し合っていくことが、心理療法関係をより治療的に促進する上で大切な試みとなる。

### ③自然発生的に生じる治療構造

面接を継続していくうちに、クライアントとセラピストの間には、言わば自然発生的に生じてくる暗黙の取り決めやルールが生まれてくるようになる。

ある摂食障害の女性クライアントは、過剰適応の傾向が強く、誰に対してもその場かぎりの表面的な迎合で対応し、友好的ではあるものの、あくまでも部分的表面的なかかわりを維持しながら、家では激しい過食嘔吐を繰り返し、そのことを悩んではいながらも止められなかった。心理療法が進むにつれて、彼女はそのような表面的な適応手段に徐々に行き詰まりを感じるようになっていき、やがて、心の中におさまりきらないものが面接室内でも見えかくれするようになった頃、彼女は「面接室の外側を現実世界、面接室内を心の内側」と象徴的に言語化し、二つの世界が混同しないための一つの手段として、建物入り口から面接室のある5階までのエレベーターを心の切り替え空間として利用するようになっていた。それが私たちの間で明らかになったのは、ある日、エレベーターが定期点検で使えなかった時、彼女は多少の混乱を示し、沈黙がちとなり、「今日はなんかやりにくい」と数回繰り返し、「先生、今日エレベーター止まってましたよね」と思いついたように語った。このことから、いつもエレベーターの中でそういう外側の自分を脱ぎ捨て、面接室の中では、気持ちを見てみようと思案するセラピストに迎合し、帰りのエレベーターでは再び外的現実に向けた表

面的態度を建て直すという、際限のない不毛な試みを繰り返していることが明らかとなり、共有されることになっていった。その後しばらくの間、エレベーターは、「今日はすぐにきた、他の人も乗っていた、ボタンを押し間違えた」などの形で、私達の間でキーワードのように使われることになったが、このように、面接室を取り巻く内外の諸条件がいつの間にかクライアントによって恒常的な治療構造の一環として取り入れられ、一定の治療的な機能を担っていることに、思いがけず出会うことがある。

また、クライアントとセラピストの間には、二人に特有の関係の持ち方や協力関係も徐々に形成されていくことになる。入室時の挨拶の仕方、連想の始め方と進め方、またその終わり方、退室時の風情など、さまざまな習慣が二人の間に徐々に定着していくようになる。少しずつ形成されていくこれらの行為は、そこでの治療関係を象徴するとともに、治療構造の一要素にもなっていくことになる。

### 4. 治療構造の心理的機能

治療構造の各要素は、さまざまな形で心的な機能を担い、治療関係を支えていると同時に、影響を与え得るものと思うので、その観点について簡単に整理してみたい。

第一に、治療構造には転移と逆転移を規定する要因としての側面があるように思う。たとえば、入院心理療法の方が外来通院による心理療法よりも治療的退行を促進しやすいとか、面接頻度の多い方が転移関係が明らかな形で表われやすいなど、治療構造のあり方自体が治療関係を左右し、心理療法の内容を選択し、転移の現れ方にも影響を与えることがある。同じように、逆転移についても、たとえば、サイコロジストによる開業心理療法の設定などでは、暴力的だったり、自傷他害傾向の強いクライアントに対しては、セラピストはどうしても防衛的になり、警戒心のあまり共感不全が

生じたりもする。心理療法が有効に働くためには、まずはセラピスト自身がその環境に抱えられているという感覚や安全感を持てることが望ましいだろう。チーム治療におけるスタッフ間の関係性、家族からの介入、スーパーバイザーの存在なども影響するかもしれない。もちろん、治療構造が全てを規定する訳ではなく、どのような構造の中においても自由に感じたり考えたりする柔軟さや創造性を持つことが理想的ではあるが、実際には治療構造のあり方によっては、さまざまに構造の影響を受けてしまうことは否定できないと思う。

第二に、治療構造は、転移の媒体として機能する側面がある。ある女性クライアントが、母親に対する積年の恨みを語り始めた頃、近くの競技場から流れてくる大歓声に苛立ち、「よくこんなひどい所で面接してますよねえ」と独り言のように呟いた。それまでにも、この大歓声は時々面接室に侵入していたが、あくまでも観念的に同じような話を繰り返すクライアントには、それがまったく聞こえていないんじゃないかと思われるほどで、むしろセラピストの方が彼女の観念から逃れて、しらずしらずのうちに歓声に聞き入ってしまうことがあった。セラピストの意図を越えたところで一方的に侵入してきたものとは言え、面接室の中で今まさに起きている現実としての大歓声にクライアントが気を止めてくれたので、セラピストはまずその事実を共有し、「あなたがお話しをしにくい環境で、私が面接をしているということですね」と介入した。彼女は苦虫を噛み潰したような表情で、「結局、母親とそっくり！必要なものは何もくれないで、自分さえよければいいと思ってるみたい」と憎々しげに即答した。その時、それまではあくまでも観念的にしか聞こえてこなかった彼女の母親に対する恨み感情が、実感を伴って私に伝わってきたように感じられた。それは、心の中で体験しているセラピスト（母親）に対するフラストレーションと怒りという内的現実と、面接を妨害する現実としての大歓声と、それを黙認し

ているセラピストの存在という外的現実との間に、一定のつながりが生まれた瞬間だったように思われ、彼女の内的体験は情緒的な実感を伴う体験として位置づけられ、不満と怒りに満ちた自己の感情に出会い、言語化が可能となり、ひいては自分が感じていたほどには不親切でもなく、むしろ彼女のフラストレーションに共感してくれるセラピストに出会うことができる可能性がそこには含まれているように感じられた。大歓声の一方的侵入という治療構造の一時的な破綻が、クライアントの転移感情に拍車をかけ、過去と現在の感情が一瞬重なった瞬間だった。このように、治療構造の各要素や特徴を共有することによって、感情や空想の言語化が触発されることが少なくない。そのような時、治療構造は無意識への橋渡しを担う媒体として機能することになり、その意味で、治療構造論的認識は心理療法における基本的観点、枠組みを提供してくれるものとして有益に活用することができるものである。

第三に、心理療法の過程ではいつでも予期せぬ事態が生じる可能性があり、治療構造も一時的部分的に変更を迫られたり破綻したりすることがある。そのような治療構造自体の在り方や展開、推移を認識するとともに、それに対するクライアントの反応や連想を注意深く聴いていると、そこには思っていた以上に意味あるものが発見され、やがて転移の理解にも新しい理解が生まれることがある。治療構造の変化や破綻には、たとえば、遅刻や欠席、他のクライアントやセラピストとの接触、セラピストの普段とは微妙に異なる受け入れ方、料金を忘れる、セラピストの休暇、中断の危機などなど、実に様々なものが挙げられる。

それが意図的なものであれ非意図的なものであれ、二人を取り巻く治療構造の現実的側面を踏まえて、ありのままに事実として認識し、共有することによって、観念化や抽象化、実感の欠如などを避ける一つの手段になり得る点が、治療構造論的認識の興味深いところでもある。クライアント

とセラピストがもっとも共有しやすい現実的側面として、治療構造は存在する。治療構造論的認識は、それを媒体として共有することによって、内的現実に対しても外的現実に対しても、等しく観察し、受け止めることのできるバランス感覚を支えてくれるように思う。

#### 5. ウィニコット「抱えることと解釈」を通して

以上に述べたような治療構造論的認識と理解は、ウィニコットの「抱えることと解釈」の中でも随所に見て取ることができる。

そこでは具体的な面接のやりとりが記載されているので、私は若い心理療法家たちと一緒にこれを何回か読む機会を持った。彼らの臨床は週一回対面法が中心なので、頻度や寝椅子の設定という違いはあるが、面接の実際がどのように行われ、展開していくのか、セラピストは何に注意を向け、観察し、そこからどのように解釈を紡ぎ出していくのか、あくまでも一つの事例ではありますが、精神分析的な心理療法の基本を学ぶ上で、たくさんの示唆を与えてもらうことができたし、ウィニコット独自の治療論や面接技法を具体的に学ぶことが出来た。

ウィニコットの観察は本当に奥深くて繊細である。ピグルでも同様の印象があるが、クライアントとのやり取りの推移を把握することにとどまらず、面接と面接の間隔の変化、呼び鈴の故障、寝椅子の上でのクライアントの身体の動き、クライアントの日常生活での出来事など、つぶさに面接を取り巻く内外の状況をきめ細かく観察し、その意味について仮説を立て、理解につなげていく。それは、小此木が、治療構造論において、セラピストにおける「インサイドアウト」と「アウトサイドイン」の双方の視点からの観察が重要であると述べていることに繋がるように感じ、治療構造論的認識が共有されているように思われた。面接室の中での二人のコミュニケーションを理解するだけでなく、その二人をあたかも俯瞰するかのよう

に広い視点から面接室の内外で起きていることを観察し、理解し、共感するというウィニコットのセラピストとしての姿勢にはたくさんの学びを得ることができる。

さらに、面接と面接の間隔を始めとする治療構造の変化やほころびが、「環境の失敗」にまつわるクライアントの内的体験や傷つきを再現することに繋がるという視点は、人格の未統合なクライアントに対する理解と対応について多くの示唆を含み、臨床的に共感、共有できるものである。

#### 6. おわりに

繰り返しになるが、治療構造の構造化は、クライアントとセラピストの出会いに始まり、頻度、時間帯、禁欲規則、キャンセルの取り扱い、構造をできるだけ守ること、など、心理療法を行うに当たっての現実的側面を定めていくことになる。構造化された治療構造は、一定の規則性と恒常性を保ち続け、容易には変更されないものになり、共有し得るシステムや治療的環境が形づくられていく。構造の習慣化によって、心理療法を取り巻く環境として治療構造はさらに定着し、「抱える環境」としての機能を持ち始めることになっていく。転移関係を育む治療的環境として、受け皿として、媒体として治療構造は機能していき、クライアントにとってもセラピストにとっても、内的体験や情緒(内的現実)と治療構造の諸要素(外的現実)が出会うことのできる場として、治療構造が活用されていく。そういう意味では、小此木による治療構造論は、週一回の設定であっても、連続性、恒常性を維持することによって、わが国に精神分析の設定を定着させるための試みであったのだろうと思う。

また、治療構造の構造化について考える時、一つの構造の設定は、おのずとその内側と外側の世界を作ることにもなる。構造化によって意味が明らかになるものと、そこから排除されていくものが同時に避けがたく生じる。クライアントとセラ

ピストが共に作り上げた構造の中においても、そこでしか共有されにくい何かが生まれると同時に、お互いに無意識的に否認したり排除したりすることもある。神経症的な人格構造であれば、そこで抱えられているものと排除されているものとの境界は概ね保持され、両者を往復することも可能だが、病態水準の深刻なクライアントにおいては、一つの構造から排除されるものは排除されたままになり、その分裂を取り扱うことはとても難しいことになりやすい。そして、唐突な面接の中断や自傷行為、自己破壊的な行動化などによって、排除されていたものはある日突然姿かたちを表したりする。その時、セラピストは往々にして初めて転移の全貌に立ち会うことになる。

したがって、構造化によって個性化されるものと、見えなくなるものについて、お互いに気づいていく過程が大切になる。そのためには、あらゆる角度から治療関係を眺めてみることでできる視点が望ましいだろう。治療構造の内側からも外側からも満遍なく観察し、今何が起きているのかを理解していく、そのような複眼的で柔軟な視点をもつことが、転移関係を理解する上では有効である。セラピストは、外的現実を踏まえようとする

とあまりにも現実的になり、内的世界に集中しようとする、外的現実を軽んじ、主観的な認知に陥るという失敗にともすると陥ってしまうことがある。内的世界も大切、外的現実も大切という、バランスのとれたあり方が望ましい。私たちは、心理療法という環境を提供するとともに、その環境を見守る存在でもあるのでしよう。

どのような治療構造の下においても、まずはその構造自体の特性、長所と短所、その中でできることとできないことについて把握することが、実際の心理療法を進めていく上では重要になる。治療構造が持つさまざまな特徴は、クライアントが精神内界や転移空想に刺激を与え、「そこで」展開し、言語化するための一つの媒介として存在する。クライアントもセラピストも、その構造上の特徴とどのようにかかわるのか、何を投影しているのか、有効に利用するのかしないのか、構造それ自体を客観的に認知しているのかどうか、などの認識を通して、クライアントが意識的にも無意識的にも表現しているものをより深く理解しようと試みる、そこに臨床的な意味と意義があると考えられる。

以上

## 文献

- 1) Ekstein, R.: Structural Aspects of Psychotherapy, Psychoanal. Rev. 1952  
古澤平作訳「精神療法の構造的側面」、精神分析研究会会報2巻1号、1953
- 2) 岩崎徹也他編：治療構造論、岩崎学術出版社、1990
- 3) 北山 修：転移と現実の間 — 関係を織り込み紡ぎ出すこと、  
精神分析研究、第45巻3号、2001
- 4) 皆川 邦直：治療関係の人間化を可能とする転移概念と現実的關係、  
精神分析研究、第45巻3号、2001
- 5) 中村留貴子：治療構造の観点から見た境界例患者の外来精神療法、  
精神分析研究、第24巻5号、1980
- 6) 〃：転移と現実的關係 — 治療構造論の観点から、  
精神分析研究、第45巻3号、2001



- 7) 小此木啓吾：治療構造論の展開とその背景、精神分析研究、第34巻1号、1980
- 8) 〃：治療構造と転移、精神分析研究、第25巻3号、1981
- 9) 〃：治療場面と治療技法 — 治療構造論的観点から、  
精神分析研究、第29巻4号、1985
- 10) Winnicott, D. W.:Holding and Interpretation, 1986.  
北山修監訳「抱えることと解釈」、岩崎学術出版社、1989

## シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2022 「環境」について考える

## 破壊性に向けての試論

上本町心理臨床オフィス 増尾 徳行

キーワード:破壊性, 原初の創造性, 移行現象

## I はじめに

シンポジウムの主題に「環境」を選んだとき、Winnicott の思考を生む母胎となった英国協会の伝統について話そう、と私は考えていました。彼自身(1966)、「**伝統の基盤なくして独創的であることはできない**」(C.W.7: 432, 強調は本人による)と述べているところだからです。けれども抄録集のために原稿を作ろうと改めて考えたとき、思わぬ事態に陥りました。たび重なる災害、感染症の世界的拡大、世界各地での戦争に私は責任がある、との考えが浮かび、頭から離れないのです。私はそれについて考えざるを得なくなりました。

異様な衝迫感から逃れるように、なんとか抄録原稿を書き上げたとき、その感覚はようやく収まりました。しかしできた原稿を読んで、私はこんなことを話すのかと愕然としました。当初の予定とはまったく違うし、あまりに暗いものだったからです。でも仕方ありません。破壊性と環境をめぐる話をしていこうと思います。別のことを話すのでは、あのぎりぎりとした感覚が再発しそうです。

破壊性をめぐって議論をするということは、Winnicott が死の欲動に取り組んだ痕跡をたどる作業になります。私たちはそれらの断片をつなぎ合わせていくことで、移行空間を生き始める赤ん坊の物語を読み取ることができるでしょう。ただ話の軸足は、赤ん坊の自己よりも、それを浮かび上がらせる背景のほうにあります。その意味で「環境」とかかわりがある、とは言えるのです。

## II Winnicott による死の欲動の扱い

Winnicott は死の欲動(Freud, 1920)という概念を嫌った、とされています。実際彼は、『モーゼと一神教』の文脈における対象の使用(1969)のなかで、つぎのように述べています。

・・・私は死の本能を愛したことはない。それにも  
し私が、アトラスが永遠に肩に背負う重荷から  
Freud を救えたら、幸せだろう。

(C.W. 9: 34)

この概念を好まない分析家は、おおむね無視することでやり過ごします。Freud 自身が、「快原理の彼岸」において「ここから述べるのは思弁である」(Freud, 1920: 24)と断りを入れて導入したものです。そうするほうがたやすいのでしょうか。

しかし Winnicott は本気で Freud を救おうとしたのだ、と私は思います。「対象の使用」(Winnicott, 1968e)論文において、彼は 10 年来の構想をかたちにしようとしていました。けれどもそれはニューヨーク精神分析協会の人たちに理解されなかった、と彼は嘆きます。

Winnicott は論考の要点が、

どんな赤ん坊の情緒発達においても、**環境のふるまい**が子どもの発達における一部であるという、**依存**の時期がある

(C.W. 9: 36, 強調は本人による)

ことである、と述べています。しかし、これでは説明が不十分であろう、と思います。

Winnicott は論文の冒頭で、対象の使用という概念について考えてみよう、と思いつきのように提起します。でもその気やすさとは裏腹に、ほとんど精神分析理論の刷新を視野に入れていたように、私にはみえます。ニューヨークの分析家たちが納得するには、理論的な下準備がそうとう必要だったことでしょう。私たちが論考を理解するのに必要そうな彼の議論を、ここに寄せ集めていこうと思います。

### III 「対象の使用」論文の前に。

先に述べたように、「対象の使用」論文は、Winnicott が長年構想してきたものをかたちにしていきます。その萌芽は、2 つめの論文集である『成熟のプロセスと促進する環境』のタイトルに暗に含まれている、と彼は述べています(C.W. 9: 36)。論文集の導入に、こう記してあります。

乳児期の依存はひとつの事実であり、ここにある論考を通じて、パーソナリティ形成理論のなかに依存を正しく取り入れようとした。

(C.W. 7: 305)

彼が依存をきわめて重視していることが、わかります。

ここで言う依存とは、Freud が「二原則」論文で提示した、あの有名な脚注に現れる状況のことです。つまり

母親から受ける世話を含めるなら、赤ん坊がこうした心的システムをほぼ実現すると考えると、このような仮説を用いることは正当化される。赤ん坊はおそらく、その内的な必要性を満たすのに幻覚するだろう。刺激の増大や満足がない状態にあっては、叫び、腕や足をばたつかせ、不快を表す。やがて幻覚した満足を経験する。

(Freud, 1911: 220)

赤ん坊は、母親の世話を受けています。しかし幻覚的な満足を経験しているその赤ん坊にとって、その満足が母親の世話に拠っていることはわかりません。これが Freud の言う一次的ナルシズムの状態です。

この描写に、絶対的依存という単一体の状態 unit status を、Winnicott は見出しました。はたから観察する私たちに見えるのは、赤ん坊とそれを抱きかかえる母親です。しかし母親の世話に気づかないままに幻覚的満足を経験している赤ん坊は、少しも気づきがないという意味で、母親に絶対的に依存しています。そしてその幻覚的な満足にあっては、赤ん坊から見て、世界には赤ん坊しか存在しないために、単一体の状態である、ということです。経験の座である自己ができる以前の赤ん坊にとって、プレー経験とでも言うべきそれは、幻覚なのです。

Winnicott は「交流することと交流のないこと」論文(1963)において、この単一体の状態の行く末を論じます。

健康であればパーソナリティの中核があり、それは分裂したパーソナリティであるほんとうの自己に対応する、ということ提案する。この中核は、知覚される対象でできた世界とは決して交流しない。それが外的現実と交流したり影響を受けたりすることがあってはならない、と人は知っている。…人はそれぞれ孤立しており、永遠に交流することなく、永遠に知られることなく、それどころか発見されることもない。

(C.W. 6: 440, 強調は本人による)

つまり単一体の状態が(のちに赤ん坊自身、つまり赤ん坊の自己となる)赤ん坊にもたらす主観的経験は、ほんとうの自己を構成します。その中核は、知覚される対象でできた世界とは決して交流がありません。すなわち、幻覚は交流のない自己に引き継がるのです。

Freud の描写にあるとおり、経験の基盤が幻覚的な満足にあることを思い起こしてください。赤ん坊の幻覚的満足は、それを与える母親なしに成り立たないの

に、幻覚と対象は交わりえないことがおわかりいただけます。Winnicott はパーソナリティ形成理論の起点に、この絶対的依存とそこから生起する交流のない自己を据えたのです。

(本題からは外れますが。私たち自身も、知覚される対象として世界の一部を構成しています。つまり私たちは、他者の中核ばかりでなく、自らの中核とも交流できません。)

Winnicott は依存のありようについて、この絶対的依存のほか、相対的依存、独立のほうへ、と分類しています(*C.W. 6*: 148-149)。彼は、この依存状態における環境側からの適応が重要であることを、折りに触れて強調してきました(たとえば 1945; 1956; 1962; 1971a; 1988)。では環境は、何に適応するのでしょうか。実は赤ん坊本人ではありません。かつて彼が赤ん坊へと発展する生来的な潜在力(*C.W. 6*: 158)、と述べたものです。そしてここでは、彼はこう言います。

私の議論の要点は、最初の欲動はそれ自身がひとつのものだ、ということである。私が「破壊」と呼ぶものだが、愛と闘争の結びついた欲動と言ってもいい。この統合物は、原初的である。自然な成熟のプロセスにおいて、赤ん坊のなかに現れる。

(*C.W. 9*: 37, 強調は本人による)

彼はこの「破壊」を、2年後に書き換えました。つまり「創造性とその起源」(1971b)において、原初の創造性ということばを用いたのです。そしてつぎの性質に触れています。すなわち、

- ・ 「人生がリアルで意味がある」という個人の感覚にかかわること
- ・ 性的欲動と攻撃的欲動の融合と見ることができること
- ・ 依存、すなわち環境要因の検討が必要であること

です。

ここで私たちが気づくのは、Winnicott が死の欲動から Freud を解き放とうとして、実際には欲動論をほとんど書き換えてしまった、ということです。Freud (1923)が自我の基盤を身体においたことからわかるように、Freud の捉える欲動の源泉は、身体にあります。そもそも、人間が生物であることに由来する本能を、より心理的な文脈で捉えようとした中間物が欲動ですから、当然です。死の欲動(1920)も、当初は生物が無生物に還ろうとする傾向として、描写されました。

しかし Winnicott が論じるそれによるなら、焦点が当てられるのは幻覚的な満足という赤ん坊の経験であり、それをもたらすのが原初の創造性である、ということになります。彼は Freud による身体に根ざした欲動論の代わりに、経験に根ざした欲動論を提起したのです。

Winnicott が生来的な潜在力、あるいは原初の創造性と述べたのは、経験の座である自己ができる以前に赤ん坊にあって、そこに自己を導く力とみたからでしょう。そしてこの力が、自己ばかりでなく対象の創造にもかかわることは、つぎのセクションで述べることになります。

この書き換えに伴い、Freud が捉えた死の欲動の文脈、すなわち無生物が生物となり無生物に還るのも、経験の文脈に位置づけられました。すなわち Winnicott は『人間の本性』(1988)で、生気のないこと *unaliveness* からいきいきとすること *aliveness* が生じ、生気のないことへ還るものとして、人生を捉えました。

私たちの人生あるいは私たちは、経験の総体である、と捉えることができます(Winnicott, 1968c)。そして経験がリアルであると感じるのは、経験そのものに由来するのではなく、自己の中核が、外的世界と交流のないことに拠っています。

交流のない自己は、単一体の状態という自己の先駆体以外に何もなくて生起しました。ゆえにその自己は、私たちそれぞれに固有のもので、それで彼(1963?)は、「存在しないことからのみ、存在することは始まる」と述べました。

そしてこの自己は、外的世界の影響を受けないために、私が存在する I-AM(1968c)ことのあるところとなりえます。ただその交流は、特殊です。Winnicott は、ピタゴラスに由来する天球の音楽を引き合いに出しています。それは耳にすることができません。「まったくもって、直覚的」(C.W. 6: 445)なのです。

この単一体の状態が成り立つのに、赤ん坊は環境に依存します。Freud の指摘を Winnicott が引用したように、赤ん坊が幻覚的な満足を得るためには、母親の世話を含める必要があります。幻覚的な満足が自己の始まりにあるために、赤ん坊は外界を知覚するようになるために、長いプロセスを必要とします。Winnicott は、それを「対象の使用」論文で述べようとしたのです。

こうして Winnicott の精神分析は、身体というより経験に根ざすものとなりました。そのことを、彼はあのことばに凝縮しました。

**心理療法は、遊ぶことの領域 2 つが重なるところに生じる。つまり患者のものと治療者のものである。心理療法は、2 人がともに遊ぶことと関係がある。**

(C.W. 8: 299, 強調は本人による)

そして遊ぶことの特徴が、幻覚に近い主観的なものと、実在のものあるいは共有された現実である客観的に知覚されるものとの相互作用が持つあてにならなさにある、と述べたのです。私たちの経験が、つねに主観的なものと客観的に知覚されるものの両方が寄与するところにあるのは、彼(1971a)が「移行現象」論文で述べたとおりです。

ニューヨークの分析家たちにとって理解し難かったのは、根本的には、Winnicott が精神分析の基盤を身体から経験へとシフトさせたことについていけなかったからだろう、と思います。でもそうでなくとも、よほど彼の理論になじんでいるのでなければ、やはり理解は難しかっただろう、と思います。理解のために、このセ

クションで引用した論考を並べてみます。

1960 親-乳児関係の理論

1963 交流することと交流のないこと、ある対立するものの研究へ

1963? 破綻の恐怖

1965 『成熟のプロセスと促進する環境』の序文

1968c 私であることの**総体**

1968d 遊ぶこと:理論的叙述

**1968e 対象の使用と同一化を通じて関係すること**

1968f 「対象の使用」論文へのコメント

1969 「モーゼと一神教」の文脈における対象の使用

1971a 移行対象と移行現象

1971b 創造性とその起源

1988 『人間の本性』

これだけのものを凝縮させていると考えれば、どうあっても難しいはずなのです。

IV そして「対象の使用」論文へ。

それでは実際に、「対象の使用」論文に入っていきます。先に述べたとおり、この論文は、赤ん坊が幻覚的な満足を得ている状態から外界を知覚するようになるまでについて、述べようとしたものです。それは間接的に、移行現象に触れるものともなります。これは経験に根ざす欲動論であり、私たちの経験とは、移行的な領域にあるからです。

Winnicott(1968e)自身のことばによれば、赤ん坊は対象と関係することから対象の使用へと能力を発達させるのであり、それが促進する環境によって成し遂げられる成熟のプロセスである、ということです。それは、つぎのようなプロセスをたどります。

- 1 主体が対象と関係する
- 2 主体が対象を破壊する
- 3 対象が主体による破壊を生き残る
- 4 主体が対象を使用する

(C.W. 8: 358-359 による)

これらを順にみていこう、と思います。

1 において、主体は Freud の述べた幻覚的満足の領域にいます。赤ん坊は乳房を幻覚し、満足を得ます。この乳房は、原初の創造性がもたらす内的対象です。ここで生じる対象関係、すなわち「対象と関係すること」は、内的世界でのことであるために、その投影の受け手となる外的対象の性質は無視されています。

そして環境である母親は、そこに乳房を提示します。この乳房そのものは、外的対象です。この赤ん坊の経験は、内的なものとの外的なものとの両方の性質があるところで起きます。すなわち、移行空間です。この領域における乳房は、移行対象です。絶対的依存の状態にある赤ん坊は、この母親による寄与に気づくことはありません。

2 で起きる破壊は、内的対象に向けられます。先に触れたように、原初の創造性は、そもそも「破壊」と呼ばれたもの、あるいは「愛と闘争の結びついた欲動」なのです。それが内的対象を創造するとは、同時に破壊を伴うことを意味します。

ここに、母親のほどよさが伴うことでしょう。ほどよいとは、完璧ではないことです。つまり創造への適応に、母親は失敗します。この失敗により、赤ん坊による乳房の破壊は正当化されます。そこに乳房がないことと、乳房の破壊が呼応するのです。

これは内的世界ばかりでなく、移行空間においても破壊は起こることを意味します。赤ん坊は、乳房があるときにはそれを創造していますし、ないときにはそれを破壊しています。移行空間は内的世界と外的世界、両方の性質があるために、当然起きる事態です。

3 が示す状況は、内的世界において対象が破壊されつくしたとき、何が起きるか、ということです。移行空間においては、移行対象がないという経験となることでしょう。このとき初めて赤ん坊に、外的対象である乳房が存在する、と知る瞬間が訪れます。つまり対象は、生き残るのです。

この瞬間に生き残った対象とは、移行対象であり、ひいては内的対象でもあります。外的対象としての乳房があるという経験が、移行空間において移行対象としての乳房が生き残った、ということを示すからです。

ここにいたるプロセスは、別の視点から捉えることができます。それが象徴化であり、内的対象として乳房が象徴化を被るプロセスでもある、ということです。Winnicott が述べている軌跡は、経験の領域から客観的に知覚できる世界にいたる道筋です。その途上で現れる移行現象とは、外的世界(の対象である私たち)からみれば、赤ん坊がそこにある外的対象を、移行現象を媒介として象徴化し、内的世界に取り込むプロセスとも言うわけですから。

4 の状況は、その先に生まれます。つまり赤ん坊が外的世界を知覚し、そこに外的対象が存在すると知るときのことです。このとき初めて、赤ん坊は外的対象を使用することができます。この使用とは、自らの投影の受け手としてではなく、外的対象が持つ性質を用いる、という意味です。

ここまでが、Winnicott のみる赤ん坊の情緒発達です。彼がよく用いる表現を借りれば、これは「ひとつの達成」です。このあとは、どうなるのでしょうか。今や経験の座である自己を持つこととなった赤ん坊は、同時に外的世界にある外的対象としての乳房も知覚しています。それはすなわち、

僕は君を愛しながら、(無意識の)空想ではずつと君を壊しているんだ

(C.W. 8: 359, 強調は本人による)

と、赤ん坊が対象に告白する事態です。外的対象があるとは、赤ん坊の創造が存続することです。それは同時に、破壊が続くことでもあります。それが原初の創造性の持つ性質だからです。その破壊は、無意識の空想のなかにあります。こうして、「無意識的破壊が背景幕に設えられる」(C.W. 8: 362)のです。

この無意識的破壊の対応物は、むしろ母親の側にもあります。Winnicott (1968b) が赤ん坊と母親のコミ

コミュニケーションを対比させ、母親側からのコミュニケーションとして、子守唄を引用します。

ねんねんころりよ きのこずえ  
かぜがふいたら ゆりかごゆれる  
えだがおれたら ゆりかごおちる  
あかちゃん ゆりかご なにもかも

赤ん坊を寝かしつける母親は、そうして赤ん坊を愛するプロセスのうちに、破壊の空想を忍び込ませます。やがて赤ん坊は、母親を外対象として知覚するようになるでしょう。母親によるあやすことのうちに含むこの空想は、その赤ん坊がやがて母親を憎むことができるようにしてやります。つまり欲動が性質として持つ破壊でなく、赤ん坊が自ら母親を攻撃することができるようになる、ということです。

これは赤ん坊に自己が生起するプロセスについて、Winnicott (1967) が述べたことの反映です。すなわち、母親が自らの主観的経験を通じて赤ん坊をめぐって起きるできごとを映し返す、ということです。それらが赤ん坊のうちにまとまることで、赤ん坊の自己が生まれます。そのプロセスにあつては、環境である母親による世話のあることとないことを通じて、赤ん坊にあつた原初の創造性は、愛することと憎むことに分化するのです。

## V 破壊性について

それにしても、私はなぜあの観念にうなされ続けたのだろう、と改めて思います。結局 Winnicott がそうして私に再考を促したのだ、と私は理解することにしました。それまで私は、「交流のない自己」(Winnicott, 1963) に取り組んでいました。それは彼の思い描く人間の始まりです。心理的な人間、と言っていいでしょう。はじめ生物的に生まれた人間は、やがて心理的に存在するようになります。そのあと、社会的に位置づけられます。この情緒発達における後半を達成するのに、彼の理論は破壊性を必要としたのです。

赤ん坊が持つ原初の創造性のうちに、その性質は含まれています。けれどもそれが展開するには、環境の側からの働きかけが必要です。それは、ここで述べたことの出発点、絶対的依存という意味での環境ではありません。あやすことを通じて交流される、ほどよさの持つネガティブな側面です。移行空間において、外的対象からもたらされる完璧でなさ、つまり乳房が提示されないことや破壊の空想などの抱えることの失敗によって、赤ん坊は憎む能力を獲得します。

Winnicott が「対象の使用」論文で描写したのは、一貫して赤ん坊の自己における経験です。それは、その赤ん坊の自己が生起するところから対象の使用にいたるまで、一貫して環境が寄与し続けている、ということでもあります。一部には、絶対的依存の痕跡として、交流のない自己を生み出します。のちに相対的依存 (Winnicott, 1960) の産物として、赤ん坊による外的世界の知覚とそれを憎むことを可能にします。この相対的依存という状態において、破壊性が重要な役割を持ちます。

私たちは、私たちの生きる場 (1968a) のなかにいます。Winnicott の理論は、つねにその相互作用を思い描いています。そこで内的世界と外的世界が共に寄与するとは、それらが呼応している、ということと言えるでしょう。それゆえ、ときに外的世界に現れる破壊は、はっきりと、私たちが無意識の背景幕に持つ破壊性に呼応しています。度重なる災害、Covid-19 の感染拡大、今世界中で起きている紛争は、私の破壊性ゆえのものです。外的対象を実際に破壊することで、ふだんは意識しえない自らの破壊性を目のあたりにするのでした。

## VI おわりに

私はこの論考を通じて、Winnicott 晩年の思考をたどろうとしました。それは彼が死の欲動に取り組んだ軌跡であり、結果として彼は精神分析の基盤を欲動から経験へとシフトさせました。生の欲動・死の欲動を原初の創造性というひとつの動機 drive にして、赤ん

坊が環境に依存することで展開する主観的経験として捉え直したのです。それが経験のうちに分化していくプロセスにおいて、環境は逐一呼応しています。結果として、私たちが世界を愛するとは、同時に壊し続けることにもなります。外的世界を知覚することの背景

にある破壊の空想は、ときとしてドラマティックにこの世界に具現化します。災害・感染症・戦争は、私には無縁のものでないのです。

#### 文献

- Freud, S. 1911 Formulations on the two principles of mental functioning. In *S.E. 12*, pp. 218-226.
- Freud, S. 1920 Beyond the pleasure principle. In *S.E. 18*, pp. 1-64.
- Freud, S. 1923 The ego and the id. In *S.E. 19*, pp. 1-66.
- Winnicott, D.W. 1945 Primitive emotional development. In *C.W. 2*, pp. 357-368.
- Winnicott, D.W. 1956 Primary maternal preoccupation. In *C.W. 5*, pp.183-188.
- Winnicott, D.W. 1960 The theory of the parent-infant relationship. In *C.W. 6*, pp. 141-158.
- Winnicott, D.W. 1963 Communicating and not communicating leading to a study of certain opposites. In *C.W. 6*, 433-446.
- Winnicott, D.W. 1963? Fear of breakdown. In *C.W. 6*, pp. 523-532.
- Winnicott, D.W. 1965 Introduction to *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. In *C.W. 7*, 305-308.
- Winnicott, D.W. 1966 The location of cultural experience. In *C.W.7*, pp. 429-436.
- Winnicott, D.W. 1967 Mirror-role of mother and family in child development. In *C.W. 8*, pp. 211-220.
- Winnicott, D.W. 1968a The place where we live. In *C.W. 8*, pp. 221-226.
- Winnicott, D.W. 1968b Communication between infant and mother, and mother and infant, compared and contrasted. In *C.W. 8*, pp. 227-237.
- Winnicott, D.W. 1968c *Sum, I am*. In *C.W. 8*, pp.267-274.
- Winnicott, D.W. 1968d Playing: A theoretical statement. In *C.W. 8*, pp. 299-312.
- Winnicott, D.W. 1968e The use of an object and relating through identifications. In *C.W. 8*, pp. 355-377.
- Winnicott, D.W. 1968f Comments on my paper 'The use of an object.' In *C.W. 8*, pp. 393-396.
- Winnicott, D.W. 1969 The use of an object in the context of *Moses and Monotheism*. In *C.W. 9*, pp. 33-38.
- Winnicott, D.W. 1971a Transitional objects and transitional phenomena. In *C.W. 9*, pp. 265-288.
- Winnicott, D.W. 1971b Creativity and its origins. In *C.W. 9*, pp. 299-318.
- Winnicott, D.W. 1988 *Human Nature*. In *C.W. 11*, pp. 23-183.



## 投稿規定

### 1. 投稿資格

投稿は原則として、日本ウィニコット協会正会員、顧問に限る。

### 2. 投稿条件

論文内容は未刊行のものに限る。

### 3. 採否

論文の採否、掲載順などは編集委員会が決定する。

### 4. カテゴリー

投稿する論文のカテゴリーは以下の通りである。

論考：ウィニコットや独立学派精神分析の実践や芸術，その関連領域における，理論，概念，歴史や文化的背景などについての著者独自の見解を提起する論考。12,000字以内を目安とする。

総説：特定の主題についての学問的動向を遠望し，筆者独自の論考を示した論文。12,000から28,000字以内を目安とする。

原著：個人・集団の心理療法や心理検査による臨床研究，観察研究，質的研究，実証研究，また文化や芸術領域等における論考であり，独立学派精神分析とその関連領域についての著者独自の主張が提起されている論考。12,000字以内を目安とする。

著者は投稿の際，掲載を希望するカテゴリーを表題の前に明記すること。

### 5. 図表

図表，写真などは図1・表1と順序を付け，それぞれに和文で題をつける。文字数の制限に図表は含まない。

### 6. 原稿の作成

原稿はワードプロセッサを用いて作成する。A4用紙に横書き，40字×40行を目安に原稿を作成すること。

### 7. 外国語の表記

人名，地名等の固有名詞は原則として原語を用いる。

(例：Winnicott, D, W / Freud, S / London)

### 8. 引用

文献の主著者のアルファベット順に番号を付し，本文中にその番号を適当な個所に付す。肩付きで(1)

(2) のように記載する。本文の末尾に「文献」という表題にて文献リストを付し、文献を番号順に記載する。各文献は、雑誌に掲載された文献については、著者名、発行年、題名、誌名、巻、ページの順、単行本の場合は、著者名、発行年、書名、出版社名、発行地の順に掲載する。

(例)

(1) 妙木浩之 (2021) : Laplanche の「謎のメッセージ」. 精神分析研究 65 (4) , 369–375

(2) Bollas, C. (1979) : The Transformational Object. *International Journal of Psychoanalysis* 60, 97-107

(3) Patrick Mahony. (1987) : *Freud as a Writer*. Yale University Press. 北山修監訳 (1996) : フロイトの書き方. 誠信書房, 東京

(4) Winnicott, D. W. (1968) : The use of an object and relating through cross identification. In Winnicott, D. W. (1971) : *Playing and Reality*. Basic Books, New York. 橋本雅雄訳(1979) : 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, 東京

## 9. 表題等

表題、著者名、著者所属、5語以内のキーワードをつける。

## 10. 要約

原著については、本文はじめに 800 字程度の邦文要旨を付す。

## 11. プライバシー

クライアントのプライバシーに十分配慮せねばならない。臨床研究においては、その情報は修飾することとし、経過の詳細等よりも主張の独自性を重視する。

## 12. 投稿の方法

投稿の際は、論文の電子データを（原則として Microsoft の Word 形式）を電子メールの添付ファイルとして、日本ウイニコット協会事務局 (jwasecretariat@gmail.com) 宛てに送信する。

**理事**

**会長** 館 直彦（たちメンタルクリニック）

**副会長** 妙木 浩之（東京国際大学/南青山心理相談室）

**理事**

石田 拓也（追手門学院大学）

生地 新（北里大学大学院医療系研究科）

大矢 泰士（東京国際大学 臨床心理学研究科）

加茂 聡子（四谷こころのクリニック）

川谷 大治（川谷医院）

工藤 晋平（名古屋大学学生支援本部／心理療法室ともしび／NPO 法人風の家）

島村 三重子（宮城野心理臨床センター）

館 直彦（会長）

恒吉 徹三（山口大学教育学部）

中村 留貴子（千駄ヶ谷心理センター）

深津 千賀子（千駄ヶ谷心理センター/大妻女子大学 ）

藤山 直樹（個人開業）

増尾 徳行（ひょうご こころの医療センター）

妙木 浩之（副会長、編集委員長）

山崎 篤（JPS 精神分析的療法家センター）

横井 公一（微風会 浜寺病院）

吉村 聡（上智大学）

渡部 京太（広島市こども療育センター）

**編集委員**

**編集委員長**

妙木 浩之

**編集委員**

大矢 泰士 加茂 聡子 工藤 晋平 館 直彦

恒吉 徹三 増尾 徳行 吉村 聡 渡部 京太

**編集事務局**

石田拓也 山崎 篤

**顧問**

北山 修（北山精神分析室） 松木 邦裕（精神分析オフィス）

Jan Abram Patrick Casement Rudi Vermote Christopher Bollas

---

2024年3月28日発行

ウィニコット研究 vol.2

発行：日本ウィニコット協会

〒543-0001

大阪府大阪市天王寺区上本町6丁目6-26 上六光陽ビル601

たちメンタルクリニック・上本町心理臨床オフィス内

e-mail : [jwasecretariat@gmail.com](mailto:jwasecretariat@gmail.com)

HP : <https://winnicottforum.com>